

## 第1回ヨーロッパ熱分析シンポジウム(ESTA)

1976年9月20-24日

英国・サルフォード大学

(東大宇航研) 神戸 博太郎

1976年夏のヨーロッパの気候は異常であった。イギリス、ドイツ、チェコスロバキアなど西よりの諸国は、6月ごろから全く雨が降らず、猛暑と湯水に悩まされた。逆にイタリア、ハンガリーなど南西部では、雨が多く、寒い夏であった。それでも、9月半ばをすぎたイングランドは、いつものように暗い空に蔽われ、時折やってくる冷たい雨にレインコートが必要であった。

ヨーロッパのほとんどの国で、大学は6月初めから10月まで授業をやめる。長い夏の休暇は、すぐやってくる陰気な冬に備えるため、少しでも多くの太陽の光を浴びようとするヨーロッパ人の智慧である。だから7月の半ばから9月の半ばまでは、自分たちの休暇のためにとっておき、その間は学会なども開かないようにするのが、彼らのやり方である。日本人とアメリカ人は夏でも働く。あまり厳しくない冬をもつわれわれが、ヨーロッパ人たちがうらやまを過ぐすのは、自然の成りゆきである。

第1回ESTA (European Symposium on Thermal Analysis)は、こうして9月末に近いイングランドで開かれた。ご存知の通り、第1回ICTAは1965年にスコットランドで開かれた。それから10年たち、3年ごとにICTAが開かれており、来年は日本で開かれようとしているのに、同じイギリス人はふたたび新しい構想をたて、ICTAの間を縫って、やはり3年ごとにESTAを開こうとした。ICTAの会長である私にとっては、全く了解し難いことであった。けれどもESTAがICTAとは無関係に計画され、事前にICTAに相談がなかったのみならず、実際に企画したのは、イギリス化学会の分析化学部会の熱測定グループでありこのグループはICTAのaffiliated groupの一つである。ICTAの創始者で現にTreasurerであるDr. R. C. Mackenzieがこの計画の有力な中心人物であったことを無視するわけにはいかない。

イギリスのグループが、何故にICTAに造反するような行動を起したのか。イギリス人というのは、常に計画を起し、自分が先頭に立っていかないと気がすまない性格をもっている。国民性だといえはそれまでだが、今回の話はむしろ経済事情によっていると解釈した方がよさそうである。

ICTAは来年日本で開かれる。日本にはいきたいが、今はポンドの価値が著しく下落しており、一般のイギリス人にとっては、日本はおろか、ヨーロッパ大陸に行くことさえ意にまかせない。それなら、外国人を自分の方に呼び寄せた方がてっとり早い、というのが、彼らの自分勝手な理論である。ともあれ、第1回のESTAは極めて迅速に企画され、しかも意外に多くの参加者を集め、大成功を収めた。ケルビンとジュールを生んだイギリスの熱科学者たちが、やはり自分たちはこの世界のリーダーだと考えたい気持は判らないでもない。

サルフォード (Salford) はマンチェスターの西北に隣接する市である。東京でいえば、川崎といった位置にあり、市の中央に炭坑があって未だに石炭を採掘している。大学は、昔の工業高校が昇格したもので、工業大学である。その大学の化学科でReaderをつとめるDr. David Dollimoreがシンポジウムの責任者で、サルフォード市がこれを後援した。ESTAの前の週には同じ場所で、イギリス熱測定グループの主催する第5回熱分析講習会が開かれ、また次の週には、第14回真空マイクロ天秤会議というのが開かれることになっていた。3週間におたるこれら一連の企画は、ドリモア博士の手で行なわれ、サルフォードに多数の人々を集めた。

30ヶ国以上から250名近い人が集ったESTAでは、イギリス連合王国が80名を送ったのは当然であるが、西ドイツとハンガリーが15名ずつ、フランスとスイスが12名、ソ連、スペイン、オランダが10名ずつを送ってきた。ついで、イタリア6名、ユーゴスラビア5名、スウェーデン4名とつづき、ベルギー、チェコスロバキア、ホーランド、オーストリア、デンマーク、ノールウェー、フィンランド、ギリシャ、トルコからの参加者があった。

ヨーロッパの外からは、北アメリカから8名(内半数はデュボンとパーキン・エルマーの装置売り込みのセールスエンジニア)、他にイラン、インド、パキスタン、日本がアジアから、エジプト、ベンガジ、南アフリカ連邦がアフリカから参加者を送った。このように、会議の参加者は、ヨーロッパ中心とはいえ、ほとんど国際会議

であり、ICTAに重ねてこのような企画をすることは、ICTAを弱める効果があると思う。けれども、イギリスの連中はなかなか強気で、要求があるから聞くのだといった姿勢をくずさなかった。

会議のプログラムは約160件の一般講演の他に、ハンガリーのF. Paulikの併用技法の総合講演があり、地元のリサールフォード大学のL. S. Barkが温度測定について講演した。Paulikの講演の後で、彼に日本人の業績を全く引

用しなかったのは残念であったという。文献が手に入らないから、といていたが、ことさらに外したのではないにしても、関心がなかったように思われた。講演の内容は一篇2ページずつのextended abstracts集がProceedingsとして配布されたので、その中に日本の書店にも出まわらと思う。プログラムその他についてご関心のある方は、私の手許にあるので、コピーを請求してほしい。

## 第12回熱測定討論会報告

(電総研) 小沢 丈夫  
(東大工) 山内 繁

第12回熱測定討論会は昭和51年10月18日(月)より20日(水)まで名古屋大学工学部において開催された。

一般講演は例年と同じく75件の参加をみたが、参加登録者は、208名と予想を下回った。丁度、名古屋が関東・関西の中間にあって交通の便は良いのであるが、地もとの参加が東京、大阪地区に比較して若干少な目であるのと、高分子学会が同時に名古屋大学で開催され、また、他学会も同じ時期に集中したために参加登録者数ではやや伸びなやみがみられたのであろうと思われる。

この他、外人講演を含めて特別講演5件、特別報告として、来年京都で開催予定の第5回国際熱分析会議の準備状況が、ICTA会長の神戸教授、ICTA-V組織委員長の関教授によって行なわれた。

本年度の討論会の運営においては、従来のような熱分析、熱測定による分類基準にかわって、反応、非反応の分類を試験的に採用したのが最大の特徴であった。これにより、従来の熱測定、熱分析の枠をはずれて、両方の専門家が共通の討論の場を持てるようにとのねらいであった。

この分類はおおむね好評であったと思われ、次年度以降も継承されてゆくと思われるが、残念ながら、両会場と同じような物質の講演が重なってしまうプログラムが一部分にできてしまっており、プログラム作製段階で、もう少しゆきとどいた配慮が必要であったと感ぜられた。

この点は次年度以降の宿題であろう。また、プログラム編成上で気の付いたことをもう一つ挙げれば、休憩時間を途中でとらなかつたため、特に午後にはかなり疲労を感じられる方が多かつたようである。この点も、プログラム編成時にもう少し配慮が必要であったと反省している次第である。

本年度の一般講演について気の付いたことを二、三挙げると、第一に、例年に比較して高分子関係の講演が減少したことである。これは、高分子学会が同時に開催されたためであるかも知れないし、高分子の分野での熱測定、熱分析の技術的問題はあらかじめ解決したと考えられるためであるかも知れない。いずれにせよ、あと、二、三年の傾向をみなければいずれとも決められないであろう。

これに対して、特に目立ったのが、生物、生化学関係の急速な伸びである。この分野の講演は18日午後のA会場を中心に行われたが、この日だけで10件の報告が行われ、聴衆も多く参加を得た。今後大いに発展の期待される分野として見守ってゆきたいと思う。

最後に、12回討論会の開催にあたって会場のお世話から懇親会まで非常にゆきとどいた運営にあたられた、現地、名古屋大学工学部原子核工学科内藤教授をはじめ内藤研究室のみなさんに感謝の意を表したい。